



十五讚歎修善鈔圖繪

中

ハ 5
3747
2



十王讚嘆修善抄圖繪卷之中

沙門 隆堯爲勸化錄之

爾時大王呵責して宣く汝が作所の罪は無量なり
 善根も少く寸善も乏しく刺慚愧を心よりへちりり
 今ハ早地獄より外に遣へる所なりと罪人餘の悲
 らに泣々申上るやう仰れ如く身も助ぶる功德
 迎も御坐せ候へば爲方なり去乍ら娑婆界
 殘し妻子眷屬の候へば定る私の爲に追善を致



十王讚嘆修善抄圖繪卷之中

<2019-21>

言の口... 卷之四
仰願ら其追善と待受度存候へ其より御慈
悲より大王の御前小召置と度と嘆申せば大王汝
左を思ひ我憐愍を以て暫相待らうと宣ふ
實と御慈悲の程を有難う此王の本地釋迦
如來ふく在せり平等如一子地御慈何卒助るや
と心を思食らえ經の中よ一切衆生を無邊を苦
と受らひ是如來一人の苦をり喻は父母の病子と思
が如くと宣ひ何し小憎思とせざる然も道を業力佛力

勝と業因感果の道理必然ありて佛の大悲を叶ひ
難と故よ恐多も大悲の御胸と焦し奉る我等は
不孝の身と切刻て悲しくも尚餘ありしと苦心よ
種々法門を説給ひ万差の根機よあてとれ給へる
そへ其をい更小餘處ふと徒よ三途小沈まん浅
猿まふ非や構々誰の人と此理と思取て佛道
入ら其佛道修行は趣ら先我身の分齊を計て
根機相應の法と求べ若機教時少背たふ徒も行

業ふの骨折く其益と得まかり故小正法念經ふ
 一時の根機は相應せざる法を行はば喻は湿る木と
 鑽て火と求んが如しとの給うけふも愚鈍なる機は
 淡法と修まらざる自己の佛性と顯せんといふ水とて
 木と捨る火とあんと求るが如くも然る末法五
 濁の此頃の衆生は機根悉劣て聖道は難行は於
 る成就せんこと難かるべし故ふ天台大師は竜樹
 菩薩の十住毘婆沙論と引て云此世界は於て道

と修するふ二種あり一は難行道と云は五濁世無佛
 時在て阿毘跋致と求甚難得此難は無數塵沙
 説も不可盡乃至喻は跛人の道と行は數里過を極
 て太辛苦如と自力と云易行道と云は謂佛語と
 信と故小念佛三昧と以て淨土ふ生ぜんと願する
 小彌陀の願力を攝持する小乗して決定して往生
 するなり疑はるなり譬は水路は船の力は因が故
 須臾も即ち十里ふ至が如きと他力と云なりと示さ

是則自力難行と云、聖道門他力易行と云
へる、淨土門也二門の勝劣明ふ聞へたり誰の人か此
旨と諍んや次、又道綽禪師の安樂集、大集
月藏經と引て云、我末法時中億々衆生起行修道
未有、一人得者當今末法是五濁惡世也唯有淨土
一門可通入路と云へり此文の意、佛道修行を
人其數多けれども末法濁世の說の如く行むる人
少く故、正しく其本意と違ふ、一人として有

か、唯淨土の二門の、有て生死と出る路也と
宣へらるり又淨土の行ふといへども往生の業とい
念佛と本といへり是則念佛、彌陀本願の行を
るの故、往生する易いと云意也本願、善惡の
機と簡ととつと殊ふら末世を惡人本として發
し給へる願也とい末代は最時と云へり故、大無量
壽經の當來之世經道滅盡我以慈悲哀愍特留
此經止住百歳と説給へる彌陀の教、小於る末法

萬年の後（一）と猶その利益ありて況や今時と正
法像法の時（二）と於てと故に正像末三時及法滅百歳
の時（三）とて通して機の善惡と簡ひて一（四）如是の利益
普くこの故釋尊（五）一代諸教の中（六）に廣彌陀とて讚
給なり故に天台（七）も諸經所讚多在彌陀と云へり剩
彌陀の名願と憶念する行者と人の中（八）に芬陀利華と
説人中の上（九）ハ也と讚給ひ或は佛説大乘莊嚴經は
於我法中（一〇）持名第一弟子と説給へば彌陀の名号

聞持して釋尊の第一弟子と成べり況や元より
道俗の七衆皆何より釋尊の弟子（一）非らず然と師の
命（二）に順じて加程慇懃に勸給へば彌陀本願の名号と
信受せしめて極たる鈍根無智の下機と以て及
難く修行を執する人甚多く釋尊此機を誠給ふ佛
語（三）より目連所問經に言我説无量壽佛國易往易
修而人不能修行往生反事九十五種外道我説此
人名无眼人名无耳人已上文の意明かりけり易往

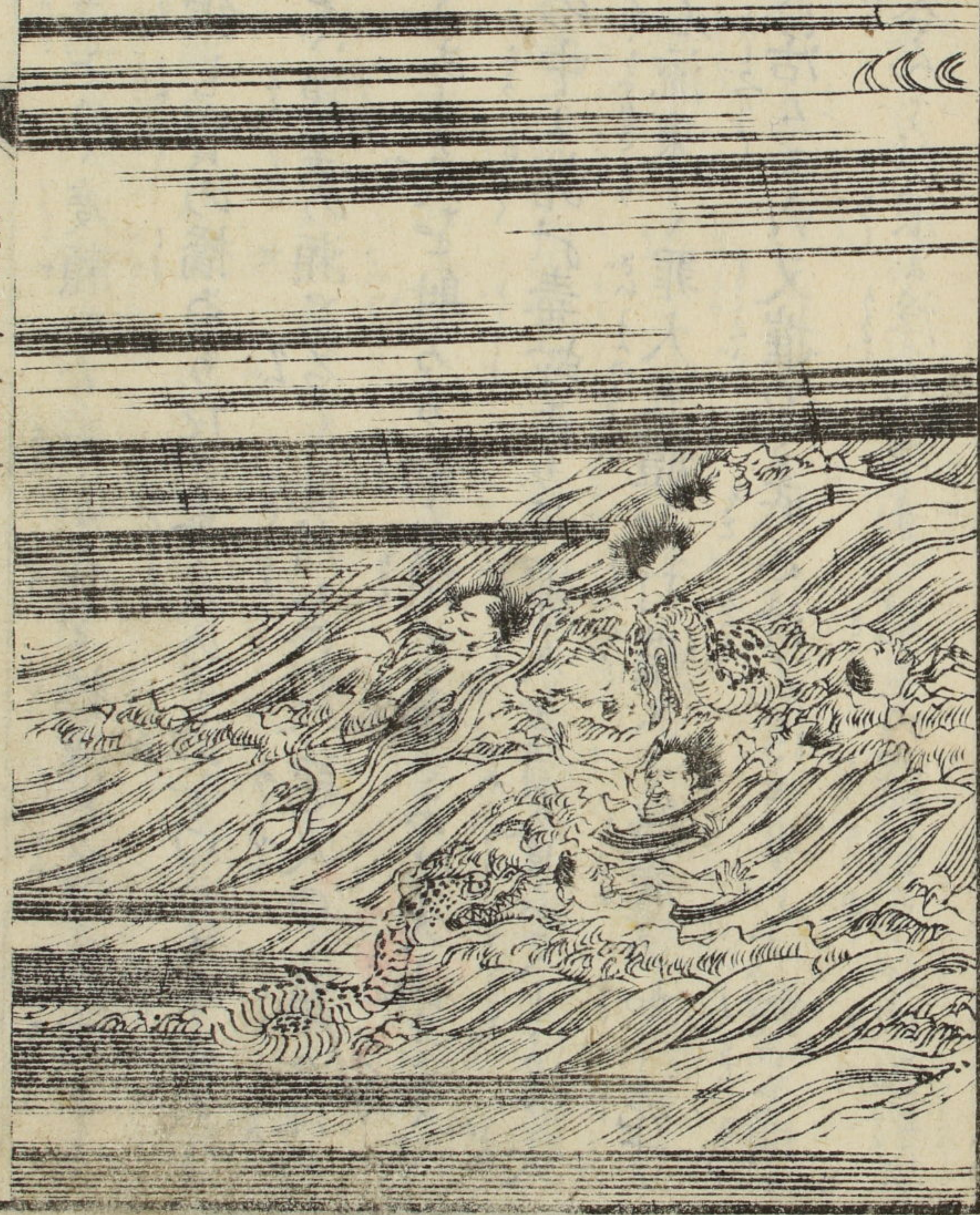
道と教とをともと猶其道を求めて叶ぬ方へ趣
けり目とやう耳とやう人の如くと喻給ふものとあす
反く九十五種の外道と事と宣へる我弟子は非と
の給へる意也よれ遺教經も我末法中不信念
佛爲魔眷屬非我弟子と説たまふ若此等の遺誡と背
て不堪の行と求人に至て争り佛弟子と称せんや
能々己が機分と計へる也若上根利智の人よ於て
修行何の妨うあらんやとて惠心先徳も利智精

進の人ハ未難とせむと許し給る但此次下の句は如予
頑魯者豈輒からんや此故に依念佛之一門との給へり
然るに惠心の先徳小勝て誰う修行をせんや此御
釋と静ふ了簡して身の程と計ひ易行の念佛と
修とせむとや或ハ又難易二道共に行せむてた罪
障ふの一期と過る人多し如此苦心を佛の教を用
ざる愚人自業自得の道理をも更恨る所と有
まづこれ普勸一切の人等心と静めて此等の理と思

案一我慢勝他の徧見翻して佛語と信じて出離と求
給ふべし計き無下少なき残の日は何を期して徒
小暮らん何と憑ての他力ふ飯せざらん網のうらう鳥
の高く飛ぶらうと悔るが如三塗は墮して重苦
と受ん時飽まで苦心の教悔は預しとのと何しふ
信受せざらうと後悔とと更ふ何の益うにあるべし
うしく思慮して徒らふ後悔の貼とと勿れ噫
三七日宗帝王本地文殊菩薩めくはるまへ此王の

所ふ至るふ一の大河あり是なん世よつ三途川なり
浄土見聞集ふ云三七日宗帝王罪人の名と記亡
者の所と録して黄泉の岸よりわく出て奈河の津
とおく喪途河ととす引路を牛頭ハ鉄棒と以て
道と教へ催行の馬頭ハ鉄叉と以てたがれと示しとい
なり○此河廣さ四十由旬めく實ハ奈河とつみま
乃河ふ三の渡ありゆへ三途河ハ名けたり上よあり
渡と淺水の瀬と名く此渡ハ水淺くして膝と過と罪

三途の大川の圖



三途の川



三途の川

の淺との渡瀬なり中ふ在と橋渡と名く此處ふら
金銀七寶の橋ありた善人の此をつくる下ふあり
渡と強溪の瀬と名く此所とた悪人の渡る流の
早と矢と射る如く浪の高と大山大山如く
浪の中は諸れ毒蛇ありて罪人を責食ふ又上より大
盤石流來り罪人五體と打摧ふと微塵の如く死す
と活らと又摧ゆる底ふ沈んとと大蛇口を開き
て呑んと浪は浮んとす鬼王の羅刹弓を以て射る

如此大苦とうけて七日七夜と暨て向の岸小つ催行
の鬼は上小持ちけ手と取て引わく引路を牛
頭は後より追立鉄の棒と以て打叩罪人いた
涙小咽て泣々宗帝王前は踞て我身は罪を以由申
上は大王の汝は正に奸曲の者なり罪業
かくて何ふ此處よ來ると然ると今此道よ來るか
かく罪を以て述と偽と争う道夏と多んや詮
す所汝の一生の間作罪業とい俱生神委く

記とて今持來り具小讀聞とて
大王自ら上給ふ御聲大は高くして雷の鳴る
如く罪人肝神と失ふ然る小娑婆於て作
殺生偷盜邪淫妄語等の四重八重は十惡罪又他人
勿論親子夫妻の間も云々心の中へ埋め
る惡業もて一々鬼の毛の先程も隠れり委細
聞せ給ふ罪人ハ此れを承りり兎角の詞を
只泪小咽ふ計をり今如何して地獄の苦

免ると思ひく申上る身の罪業ハ今の御符
の面に隠れ候に陳し候に去り沙婆婆の子
供も多く親族も多く身に候に定て善根と
送り申す候に徧く大王の御慈悲を
慙く御待下りと歎き申す宗帝王表より
願ひ給ふと御心に大悲をめり實に其の
謂はりの一つ惡業の上に其の重方を以て獄
苦と定むと歎きの不便を娑婆の追

十五賢聖多壽圖會卷之十

謁一奉^{まう}末代惡世の衆生^{しゆじやう}ハい^いる法^{ほう}由^{よし}く^く生^{せい}
一死^しと離^りと申^まと^とと^とか^かと問^と奉^{まう}ら^らし^し時^{とき}文殊^{もんじゆ}答^{こた}て
宣^{のたま}り^り汝^{なんぢ}正^{ただ}佛^{ぶつ}と念^{ねん}せ^せ又^{また}問^と何^{なに}の佛^{ぶつ}と念^{ねん}じ^じ
て^て文殊^{もんじゆ}の^のま^まり^り西方^{さいほう}の阿^あ弥^い陀^だ佛^{ぶつ}と念^{ねん}せ^せ出^い
離^り生死^{しじ}の道^{みち}多^{おほ}く^くと^と煩^{わづ}惱^{なう}惡^{あく}業^{ごう}の凡^{おほ}夫^{おと}速^{すみ}く^く生^{せい}
死^しと出^いるの道^{みち}亦^{また}の法^{ほう}如^{ごと}く^く正^{ただ}しく教^{しよ}給^{たま}ふ誰^{たれ}か^か以^{もつ}
小^こ背^{そむ}く^くへ^へ然^{しか}し^し此^こ等^{とう}の理^りと以^{もつ}て^て惟^{ただ}ら^らぬ^ぬ彌^い陀^だの^の本^{ほん}
願^{ねん}と憶^{おぼ}念^{ねん}し^し名^な号^{ごう}と称^{しょう}念^{ねん}して^{して}往^{かう}生^{じやう}と期^ごす^すの^の

ち^ちの宗^{そう}帝^{てい}王^{わう}の本地^{ほんぢ}垂^た迹^じハ御^ご意^いハ契^{くわ}り^りて^て支^し更^{ごう}
不可^ふ有^{ゆう}疑^ぎ去^こ程^{じやう}ハ罪^{ざい}人^{にん}娑^さ婆^ばの追^お福^{ふく}と待^{まち}と^とあ^あら^らぬ^ぬ孝^{かう}
子^こ等^{とう}わ^わり^りて^て懃^{けん}ハ中^{ちゆう}陰^{いん}の佛^{ぶつ}事^じと營^{えい}供^{くう}佛^{ぶつ}施^せ僧^{そう}報^{ほう}恩^{おん}
の行^{ぎやう}ハと為^な時^{とき}ハ重^{じゆう}罪^{ざい}と滅^{めつ}ハ地^ぢ獄^{ごく}の苦^くと道^{みち}て喜^{よろこ}ぶ^ぶこと
限^{かぎ}ち^ちく^く大^{だい}王^{わう}亦^{また}隨^{ずい}喜^ぎハ給^{たま}ひ^ひ汝^{なんぢ}ハ似^にめ^め殊^{じゆ}勝^{しやう}の親^{しん}族^{しやく}共^{ども}
哉^やと褒^ほ美^びハ給^{たま}ひ^ひ或^{ある}ハ娑^さ婆^ばハ返^{かへ}ハ^ハ或^{ある}ハ罪^{ざい}の裁^{さい}斷^{だん}猶^{なほ}不^ふ
定^{ぢやう}ち^ちる^る時^{とき}ハ次^{つぎ}の王^{わう}へ遣^{つか}は^はし^し如^{ごと}く^く苦^く患^{わん}ハ^ハ誰^{たれ}か^か所^{しよ}
為^なす^すハ皆^{みな}是^{これ}ハ已^まじ^じハ一^{いつ}心^{しん}より起^{おこ}故^{ゆゑ}ハ論^{ろん}ハ^ハ心^{しん}如^{ごと}く^く画^が師^し能^{あた}る^る

画諸鳥獸草木等心能作諸如來心能作天堂地
 獄とり二世一切有為の諸法は皆是心の所造なり
 若佛の教誡と信受奉行し奉つてんん何の時り生
 死の苦海を渡るべし心巧所悉く皆二塗業をうご
 ごとくけしむあり二世の因果響れ聲小應じても如
 く影の形小添るが如く唐隨冀州臨黃縣を東小
 耿伏生と云者ありその伏生が母夫れ絹二疋と盜
 娘の所へ密よ送る後數年とへて母死と生と替て我

子伏生が家小飼り猪と生を程をくして其猪二の
 子と生その二の子と殺して食ふ其後にけり子と生
 と依り伏生彼猪と屠者小賣んと約束せり屠者猪
 羊をけり殺して切賣ふとて業をねむりて買て
 切賣せんとい時一人の僧ありて伏生が家小來り食
 と乞少伏生が家小休息して一人の童と將て猪の圈
 の中へ行てらん猪の童子よ告く云我此家の主
 伏生が母をり昔伏生が父をり為の夫をりふその夫よ

隠して絹二疋と盗取て娘小與科いふ依よ今伏生が
家の猪とちりて二子と生う伏生が為な食くれて既小
今いま其債そのとひのと返償かへり然さう今更小又屠者とほ者や賣うんと
願ねがひ我為わがためよ是これと生うり云童子具小僧そうよ語ことる僧云
汝甚顛狂ふし狂きやうや猪何ぞ物云いふと有ありやと少頃あまおく
屠者外とほより來きり猪ぶたと引出ひきだすと時彼猪圈の中
より走出でる僧の牀とこ下もとよ向むかふ屠者跡あとと追おつて僧の處
小至こる僧屠者とほ者や向むかふて云猪ぶたと許ゆるす至いたる我買取わが取とべ

いと遂小錢ついでと與あり猪ぶたと買取かひ密ひそに伏生小語ふして云
汝の中なか昔絹二疋むかしを失うはれちやと伏生が云く
父存生の時絹二疋ちちと失うはるまり支しありと僧具小童子
の云いへる旨しむと語ことる伏生此こゝと聞きく悲嘆かな涕なみだ泣なりて止とま
と勤こゝろ小猪母ぶたと養やしなふ數日かずとへて猪忽かたし小死しとと
出い出で又長安あながんの筆生趙しやう娘むすめ親おやの錢せん百文ひゃくもん隠かくり盗ぬす紅
白粉しろこと買かいと思おもふ未買いまざる前まへよ死しして羊ひつぎと生うま
十二年じふにねんの後のちよ親おやれ家いへよ買かひと命いのちと取とりて前生まへ

百文の債と返せりと眞報記よ出たり又元住禪師
 の砂石集ふ昔美濃國の山中ふ百姓の母雉の生
 て殿の鷹野は時鷹小追て我子の家よ飛込人の如
 物云く女房ふ語つ其證據ハ前生一目わり今雉と
 生て亦一目わり助ふと乞ふに此を釜の中ふ入蓋
 とし助け夫飯と待て件の事と具語夫邪見
 みて此雉と殺し食ふよ五體燃るが如く七顛八
 倒して一時ごり終小悶絶し血吐て死せり此外

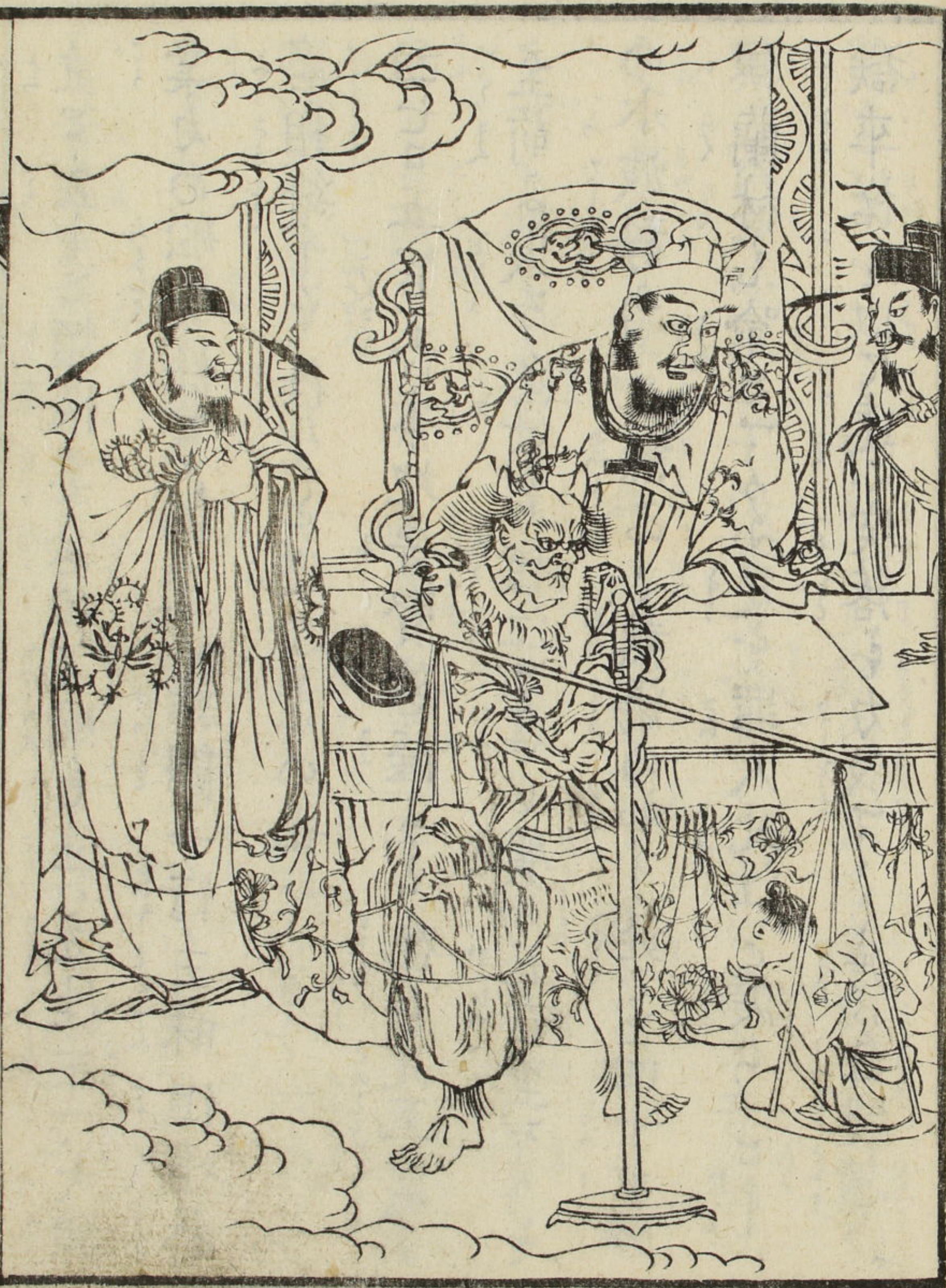
三國通して古今の書よ現報あり事數とよるは
 看ふくその罪報の遁る現小親の物夫物ケレ
 どと盜隠せり罪遁る更く疾り遅る必と其報
 有事如此我等ハ元始己來此迷るよ造と造る惡
 業の芥子ごり此形あふ一人の罪業も三千界
 小置處有へうふと宜ふ喻ハ千里の道と往んよ百
 日の日數と經べ飯らんよ時と亦百日の勞ち
 ん飯ごるが如く元始の罪障と消滅して悟の故郷

飯人よ三大阿僧祇劫と經て難行苦行せんとん生死
 と度脱すところ叶さるやう然るふ船に乗じて順風は任
 せば己が足脚と勞せしめて易く故郷は飯ら如く水道
 乗船と喻給へる弥陀弘誓の船に乗彼願力定得往生
 と疑はく慮らる若不生者の誓と信し一向称名を
 船歌と諷し今年も一年浄土の岸に近付ことと喜び
 今日と一日往生近付まと思ひ巡らる喜びごとく一度
 船に乗込ぬまば如何故郷は戀しくとも次第小故郷は

遠ざかり急ぐ心はけしきと約速の湊を近付如く
 只管称名の身あせとせよ久遠劫より流轉せらる苦惱の
 旧里は捨難く未だ見も馴ぬ安養の淨刹は結構と承
 知らるつと急ぎ参り度心の起らぬぞ凡夫を然る
 弘誓の船に阿弥陀如來の御船頭が生起の苦海に
 此弥陀が案内知て難義はぬ安養は彼岸より
 受合迎取との御治定は我等は何とて斯淺間
 ぞや○乗るくはるは嬉しむ蟹小船高瀬の波は

十三言四句集卷之四

十五



十三世西行法師御成道御成道御成道



四七日
五官王

十三世西行法師御成道御成道御成道

立とるゝと煩惱妄念の波風と立ハ立往生一ハ大願
業力の船長任せの上ハ結歸一行三昧但唯称
名相續して往生と遂へまゝの也

四七日五官王ハ本地普賢菩薩とて在と此王處
至前ハ大ち江あり恒江と名く廣く五百里ありそ
の水波静めて熱く熱湯の如く是こと四十里の
伊蘭林も喻とて下不足と罪人此江と渡らとて
獄卒楯と以て速く突落と力及ずと渡ハ身體忍ら

亂と裂て苦と限と又鉄の喙の毒虫多く集て
罪人の身小取付て吸食ふ辛とて七日七夜大苦惱と
受て其後ハ五官王御前小至る罪人大王と舞して歎
て云く此まで參ら道とて大苦惱誠小身心と惱す
申と度限なく覺へ候然ハ娑婆小く作つと罪業是
程迄ハ覺申と云ハ其時大王瞋て宜く汝知とや
えらり小因大果の謂ある事汝が心ハ小罪と思ふと
も苦果と感する度ハ必と大ちり然と汝愚めて

眞官と疑ひ恨る豈甚謂や詮とる所汝ら一生の間
 の罪業と一と失として汝が身の中の底小埋となり
 其を知と秤は掛て見ると仰あり其時鬼共此と受
 取て業量の秤よかりの秤の權は五十丈の大磐石を
 罪人の身は僅は五尺を體と以て掛合るとふ石の輕
 かと羊毛の如く業道如秤重と者先牽の道理をれば
 必重と方傾ば也其時牛頭面々よ此と指して口々ふ
 そり如何々々と耻うひとばいと詮方々くと覺

即介臺より取下と云く汝憚るともみちり
 惡業とほり乍ら此と諍こと罪科の上を重罪
 ちりて鉄の楯と以て百度千度五體と打ば身躰
 手足破摧るゝ微塵の如く死と業報の命
 ちと活へりて又打る扱暫息と纏や大王の
 宜く汝らとけ汝婆よ在り妻子慇小汝を吊るとの
 是迄の王此所も善所の生も轉せんと
 小汝が死して後いたる我身の豈や渡世此營のとわく

汝が更とハ打忘實しく吊ふ事もナク夫故に作此すて
 も迷ふ來つめと妻子後世の怨かりし佛と説と
 と給へると聞乍徒らふ愛欲を起して日を重し小
 今の苦もふ代もりや否や然も怨も我身とハ恨じ
 て正直の眞衆を恨らる愚痴の至也汝一日一夜を
 經らふたは八億四千の惡念を起しつるや何と
 一念の懺悔とと修せざりし但懺悔の方法も定て
 暗うりん若然にちや彌陀の名号とハ稱へざりける

念々稱名常懺悔理すあり常念佛とる人の懺悔の功
 徳ととちる故に衆罪悉く消滅を罪障即ち滅し
 かる惡處ふ來るより而るを善友とハ嫌て遠ざり
 惡友ふ好く近付十惡と忿ふ犯してさしも平等大
 悲の釋迦彌陀二尊は父母も捨られ顔無此處ま
 で來れりこの不當よ但聊めると佛法結縁の有
 ばや今まて地獄も落どして此まで來るならんめと
 復或は壇茶幢の符と以ていふことを責誠たす然て

後此罪人々々次つぎの王み小渡こわたせし宜よろふ此御誠このごまことを
 態かたち方かたと見聞集けんもんしゅうふし四七日しよちにちよご五ご官くわん王わう穴あな五ご業ごう量りやうを
 秤はかりと掛かて罪つみの輕重けいちゆうと糺ただし地ちゆり雙そう幢とうの符ふ小任せうにんと
 罪つみの多少たうしやうとあるとへり此王このみ本地ほんぢ懺悔ざんげ教主けしゆの普ふ
 賢けん大士だいし少せうく在ま在まセま加か搦なよ仰おほらせと理ことわりあり華嚴經けごんぎやう
 の普賢行願品ふけんぎやうくわんしんよ願我臨欲命終時盡除一切諸ねがひたまはせむしに
 障しょう導どう面見めんけん彼佛阿弥陀即往生安樂國との給たまはらるべし
 此菩薩このぼさつも十地等覺じゆぢとうかくの位ゐよ登のぼつて給たまへばも猶なほ亦また安養あんやうの

往生しやうじやうと遂つひて阿弥陀佛あみだぶつに値奉あひかたらんと誓ちか給たまはらるべし去こ
 といふと法華三昧ほふけさんまいと修行しゆぎやうせし大行禪師たいぎやうぜんじゆと汝なんぢ
 當まづ當まづ彌陀みだの名号なごうと唱なめて教しゆ給たまひらるべしとや如此ごとく
 示し給たまひらるべし下根げこんの凡夫ぼんぷ自力じりき難行なんぎやうの修しゆ難がたと
 と哀あはれ給たまひらるべし他力易行たうりきいぎやうの念佛ねんぶつを勸給すすひらるべし
 へし末代まつだいの凡夫ぼんぷ何なにぞ此教このしゆふ背そむくや彼法華三昧あのほふけさんまい
 の道場みちばうよと禪定堅固ぜんぢやうけんこの水澄みづすみざれば佛性ぶつじやうの月淨つきじやう
 難がたく華嚴けごん一心いしんの會場くわいばうふし諸法しよほふ空寂くうじやくの空精くうじやうざれば

妄想の雲去るみくち一故よ發露涕泣の威儀と久
 三世一念の觀心も成じ難くして一期と過しやん三
 途の苦報いづせん不知たふ不論心亂不論不淨
 但念弥陀即得往生とあり弥陀の智願海お身と
 任てこの寶國小往詣して三諦止觀の花を開き一
 心法海の月と耀らんよ如是存とくち一本地
 普賢大士の素意ちも契ひ垂迹五官大王なる本懷
 小と順とべとのちと扱罪人種々の呵責と受て其

後閻魔王小渡らると説給ふ觀佛三昧經ハ七種
 の根本罪と明して如是重罪と造つて者命終て
 阿鼻大地獄の中小墮在して八万大劫と經く无量
 の苦と受夏を委く説給へり寶蓮香比丘尼ハ菩薩
 戒と持てり私小姪欲と行ひく漫よ云へる行姪ハ
 是偷盜よ非と更ふ業報此可有みくち一此語と
 出し終らざるに先女根より大猛火と生じ後小
 身の節々燃て現身小无間地獄小墮在せしむと

宗鏡録七十六見たり又世間不孝不義の其一
 其報と受て例古今少やらず唐隨の大業年
 中ふ河南の人妻ありて姑と養ふに至て不孝な
 時姑兩眼共小盲たり彼女房ある時蚯蚓と煮て
 此を姑小食し姑其味不常更と怪密一の齋と
 隠し置く我子見せし小子此を見て大小驚き
 妻と去その嫁未と父母を家小飯に至る中途
 めて風雨雷電して黒雲舞下東西を奔る小其

女と失ふ暫有て女虚空より落つ此を見し體と
 衣類も旧の如し頭より替て白犬の頭と成り
 物云く常違ふ夫と向て云く我姑小不
 孝たは以て如此の天罰と受たりと云其時夫
 水を將官小送る官人形罰を加て其後此と
 市中は棄らるる街小在て乞食して其耻を
 晒し終るその終る處と知とや真報記 又宋の李
 生性得父母小孝心なり母漸年たけく盲る

李生外へ出るが、ふ再三その女房云付て、老母
 と介抱養育せよと妻の金氏ハ夫を言小違ひ或時
 夫他行の留主小餅と焼て姑へ進る小我子の糞
 尿の地へ落たると見く少くも取り取て餅の中へ
 入て與る小姑らねと食う糞の香ありて食ふ
 堪と密小此と慥も、李生が他處より飯つけ
 とい此を見せると李生大心瞋て杖と提て妻を
 打妻即ち走て逃關王の廟中へ隠入る李生跡

有り追く廟の中へ入る此を尋求る小見へと
 一足の狗有て案の下へ伏し居て瞬しつ
 近付ど能々此とせられど其身未全狗ふちり
 終と李生かの金氏が父母を呼く此分野を見
 せし狗涙と流し父母小向て云く我不孝あり
 て糞穢とめて姑へ與り咎小依て今忽ち變じて
 狗とせし此を聞者遠近と云ど來て
 者甚多し十日餘りて此狗死と

德應篇
 小見也 以等

皆五逆も同類業なりん天罰を蒙りて耻を晒し勿
 論るの身一人は非を耻辱と兩親兄弟及一刹
 先祖の家系を汚し極重の惡人なりとて未來ハ无
 間小墮一八万劫中の大苦惱を受んる更ふ疑
 々普く勸じ一切世間の人民此等の物語を聞
 小付てと我身々々を省く神明佛陀の眞見と
 耻恐深く慚愧の心を起して後世の大夏を寛セ
 小と給ふる勿れ殊更に念佛と人の中小惡聞か

して惡人正機の本願をば惡心と嗜惡業と
 恐るゝ自力定散の分齊なり惡人正機の本願と
 疑道理を云て心の儘に惡を造て慚愧をば人
 わり是何夏とや惡人攝取の本願をば一と恣
 小惡と作れふ非も既に第十八願及六の願成就
 の文に唯除五逆誹謗正法と説き同じと經の終
 小ハ五惡五善と説て當來の弥勒を告て念佛行
 者の信後と誠給ひ弥勒成道しく龍華三會の説

法の時も亦如此説誠給へとのまう上も既も作つる罪つと
 こやも撰取せんしゆし給たまふべしれ本願ほんがんを後う楯たてめし思おもふ儘ままり
 罪つを作つるとも非あらど此故このゆゑふ法やう然ぜん上人じやうじんの五逆ごぎやくも十惡じゆじやく
 と生いると信しんじて小罪せうざいをも犯まさしとちもへしてもそ
 仰おほらしも或法語あうやうごよい田いのうりし心こころも思直しんちよくし友とも
 同行どうぎやうゆも昵ぢふくあらしましや信しんともりしりしるを驗あみこそ
 候あめとと又藥ありし毒どくと好このへしびもつらるや或
 又无明むみやうの毒どくは醉まりし者もの小惡せうあくを心こころの儘まま作つると云いんは

酒さけ小醉せうざいたる人ひとは増々ま酒さけと勸すすんだ如ごとしと誠まこと給たまふはつ
 小せうも毒どくと消妙藥しょうめうやくと右みぎの手て小握せうにぎて左ひだりの手ては毒どくと食くん
 ありしや毒どくと知しるは食く者もの有あるはす藥くすりの功能こうのうと
 疑うひし非あらざるは如ごとし彼か一流義いちりゆうぎの念佛無間にふつむけんと云いへるは如ごとし
 心こころへあやましる人ひとのあらしましるは實じつ小無間せうむけんの業ごうと云いへる
 とや利劔りけん即すなはち彌陀号みだごう一聲いちじやう称念しやうねん罪つ皆除みなぞの利刀りたうを
 以もつて惡あくく心こころへ誤あらましる隨地獄ずいちやくの大怪我おほいかがと云いへる有あり
 小利せうりとあり凡夫はんぶ有漏うろうの修善しゆぜんから切味せんみの鈍おろろ

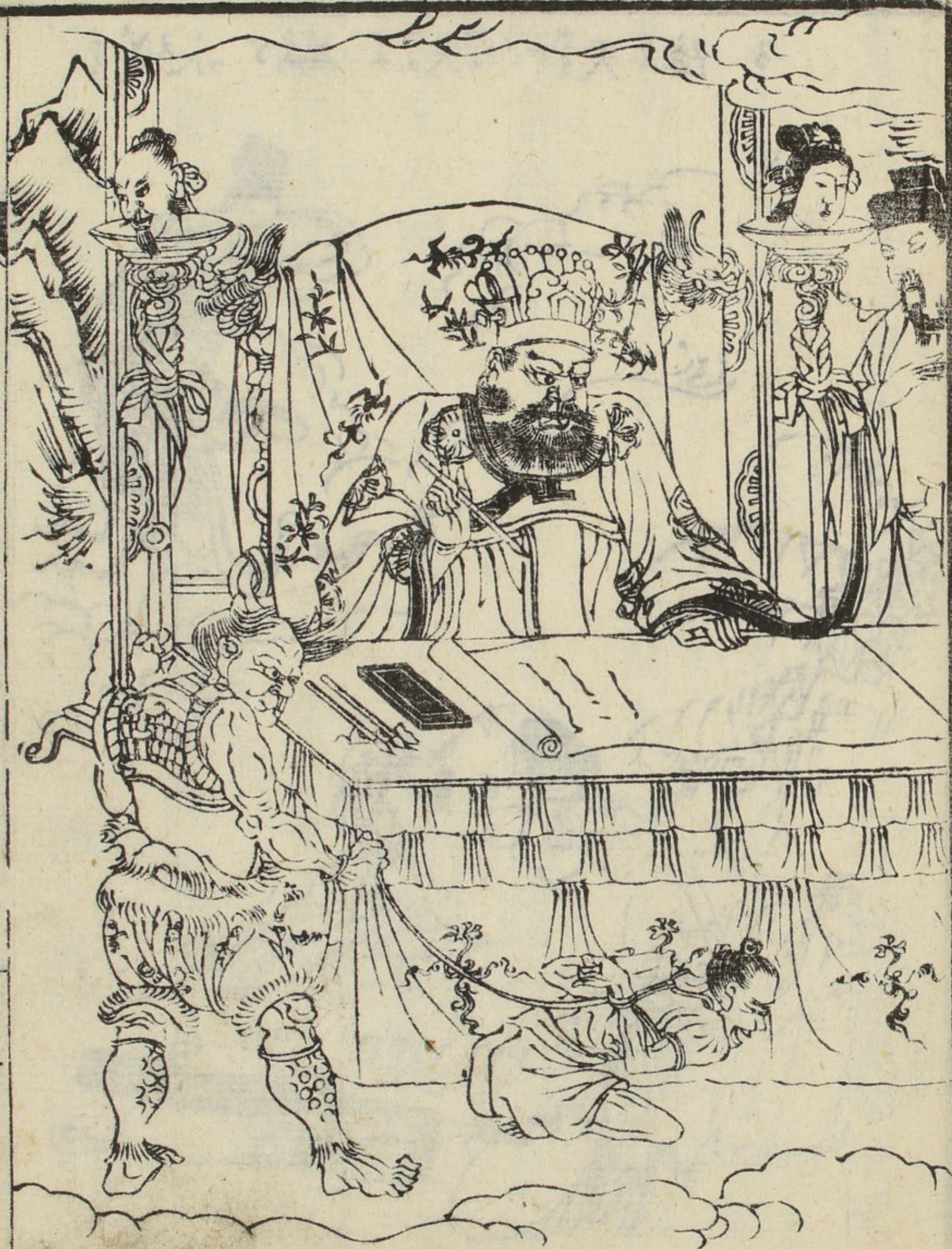
ふい怪我も亦小かろく大利无上と説たもくも
 弥陀念佛の名釵い悪く心へ誤い无上の大損を
 ろくへ能々知識小順同行の親近して如實に聞
 て信受奉行とてとめのけり

五七日の閻魔大王は本地地藏菩薩ゆく在る閻
 魔とい天竺の言唐土ふい息諍王と翻譯してとの
 故に此王の所より諍と息れいけり此王宮は人間
 の大地と去るふく五百由旬の下を縦横の分



一三言口作事原會卷之四

二五



三言四語會卷之三

三十一



五七日

閻魔大王

三言四語會卷之三

三十一

る 降天女天女は 為る 永 謹



量も亦五百由旬ちり正しく大王の御坐處ハ縦横
 六十由旬とあり其城七重山々大城のくまうハ鉄
 垣して四方よ各々鉄の門あり門を左右ハハす
 壇茶幢ありその幢の上よ同く人間の頭ありて
 しく人間の振舞と見ろく又明かり罪人の一
 生の善悪と委記て大王小奏と大王此符と以て此
 と斷給ふ次よ別院あり光明院と名く此の院
 中ふ九面の鏡あり八方よ各一の鏡と掛たり中臺の

鏡と淨頗利鏡と名く凡そ此王ハ御負ノ猛惡忿怒の相と現レ給ふ罪人ノ肝神を見奉るふまろ肝神と失ふ其故ハ御眼大ニ光るく日月の如御顔赤くして瞋給へる勢衆人の目と暗く肝と消す又罪人と恥への怒給へる御聲大ニ高くして百千の雷の一度小鳴落るが如し即罪人ニ宣はく汝この處小來る昔より已來幾千万度と云數を知らずと云と娑婆ニ於て佛道修行して

再この惡道ニ來更勿く其度毎小云會し小其甲斐なく又還來るむく不届至極なり誠ニ受難人
 人身と受幸小佛法流布の國ニ生じ人々佛道修行するを餘所と見たりて修行せず心の儘小惡と造て又この惡趣ニ來る誠ニ寶の山ニ入る手と空くして飯を食はた汝更也汝娑婆ニ在り時ハ放逸无慙みて慈悲をかくし乞丐非人無縁の者をも痛く慈しむ惜置

財寶真途の資糧とちや否やしも痛り冊と
 まはる妻子の汝が今の苦も代もるや否やと耻し
 め給へ罪人の道理は責られて唯口を閉て泪と咽
 泣より外のあぢき大王重く宣く汝が一生の罪
 業とば露程と誤らば俱生神の鉄札小記を置り
 一々小讀で聞とくしとく自ら此とよ給ふ其御
 聲大小して太山の崩懸が如し扱是は何よ汝が
 娑婆あまの振舞よ非どや如此の罪業との作り

居て生涯の間はりも慙愧の心もわけて今此處
 小來こま後悔こうかい嘆なげくとと甲斐かひあふまじけれ
 既すでに生處しやうじよと地獄ぢごくと定め給へ罪人あま
 つの悲かなさに若わかや遁にげる道みちや有あると思おもひ泣な々
 申まを上ある様さま今讀聞よみきせ給ふ罪業ざいごふの中なか小少せうせう々々左
 様のよう支しと御坐ござあまま多分たぶんハ覺しへ申まをさば若わかや俱
 生神しやうじんの筆ふでを誤あやるとや存ぞん候こう又少せうの罪つみと御
 慈悲じを以もつて御免ごめん下くださると振あ々申上まをあと其

時大王忽いふ顔色かほかうとせ給たまひ願給たまふ事限かぎり
良よありて宣く汝く聞既も小あ婆ままくとみ左ひだり様さま
真まことの知見けんとも憚おそとも目め前まへの欲境よく小のと誑らん
て只今いま憂うれ目めと見んととい忘わすれとと妄語ご惡あく口くち
以もて心の儘よ致せしふいととの癖失あやとと此こゝ
正ただ直ただ斷た罪ざいの庭小に於おて憲法けんぽうに眞衆しんしゆを掠疑りひ既
頭あたまとと罪ざい業ごうを猶も兎や角と諍ひ弥々と重おも苦くの
基もとととつもと全惡あく心しん以もて汝と呵責かすらよ非
三十一

又一また罪ざいとして今いま我われく水と加る所よ非ど自業ごう自
得とくの報ちとと己が心と恨むべと有く獄卒ごくそつ
と召て宣く此ちら罪ざい人にんの俱生くしやうじん神しんの符と疑ひ兎
や角申まをと俱生くしやうじん神しんの始て生く時俱とも生ま
と其の故よ俱生くしやうじん神しんと名く故小晝夜ちや一分も身と離
れとと記とと符ふと毛の先程さきほども違
ふべと其と諍らると淨頗じゆん利りの鏡よ
て永く汝が諍と止べと仰おほめと即すなはち鬼共いっしょ御ご意い
三十二

一三賢聖長壽寺圖會卷之十

と蒙り罪人の左右の手を取て提げて光明院を
宮殿を押開と九面の鏡の中は罪人を置よ一々
の鏡此面小一生の間作り作り罪業のこり
なく人知も心一は思ひ念々作々の悪業こ
て一もとらさばいりり浮移り隅とちり其
時俱生神と始として衆の獄卒とと面々小指
口々よそ終をよ罪人これ俱生神誤りの眞
官三寶ハ汝が朝夕の振舞明小照見し給ふと已

か眼の暗と儘ふく隠たると思ふふ全く隠け
とやよ今よ於るの罪業すくに定るぬ此上何
と待へと速小地獄は落とべり獄卒共大と
小怒と起し眼を闔と見開と口より炎を吹出
とて鉄の柵を取直し罪人の後小立寄り罪人
餘りの怖りよ血の泪と溢して覆る臥獄卒よと
髻と掴んで頭と引上鏡小指付て其よと責ら
のこちりす柵と以て打叩ハ聲をわけり叫どと

後よ息を絶てて微塵の如く打摧つる活々と
云く摩磨れむ又旧の如き人と成て若と受
其後罪人思やう實小俱生神れ誤つる露程と
やう加程の支と知りし何し小罪と違へる夢
幻の如き一旦此身の爲は万劫小重なる因と
種なる事の悔と今小至る免ふ事と爲
方々々々を盡せぬの泪ふく心は願は安婆の
妻子眷属の我と吊ひ助よかと思計し之又

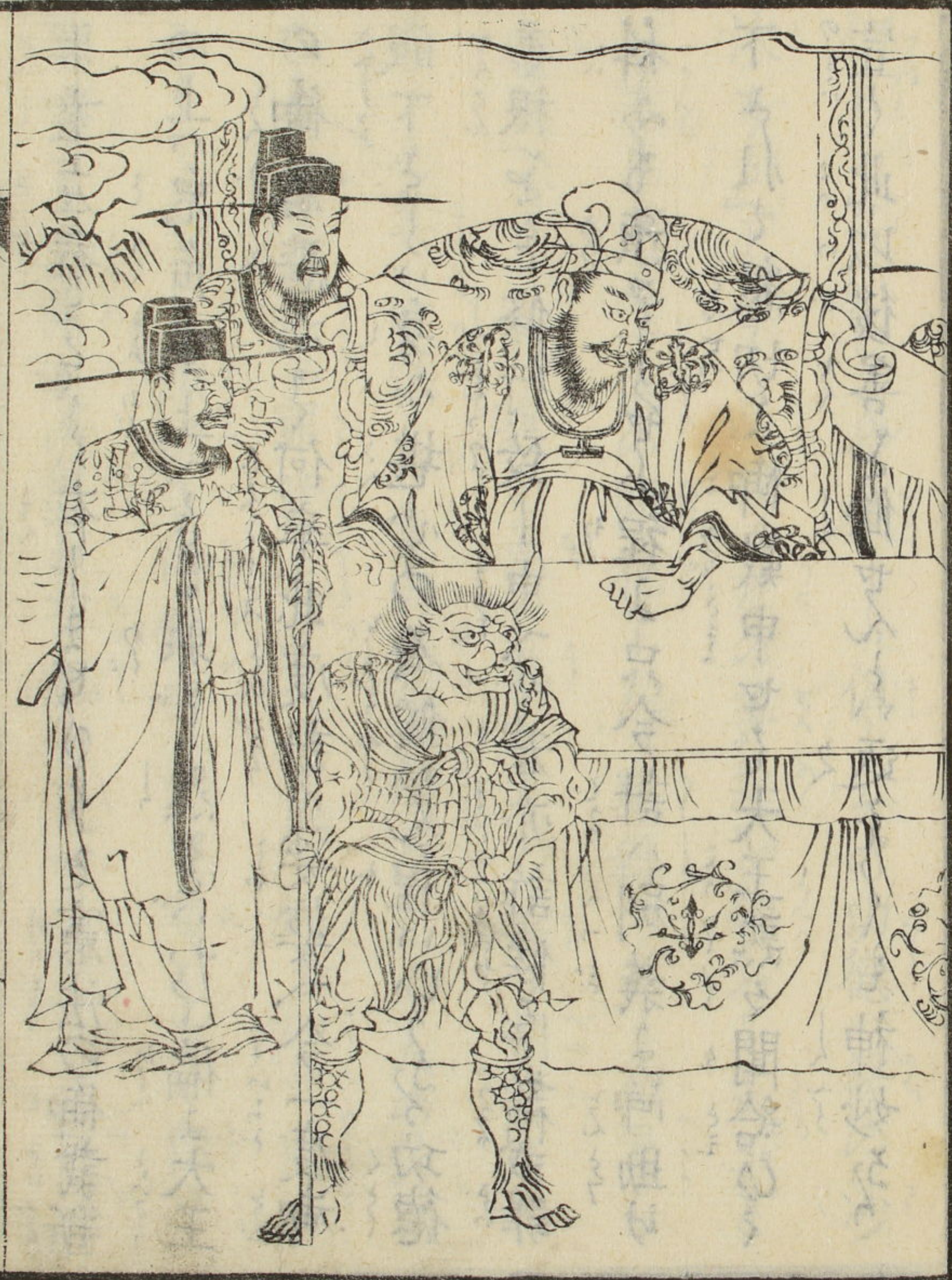
見聞集か五七日の朝より閻魔王の責と蒙り頭
と擲く頗梨の業鏡は向ふ情昔れりし心
併に罪を阿房羅刹の勢とぞいれ
獵師の鹿は値らば如く牛頭馬頭の聲を聞か雷
電のやどとくふ似たり云抑この大王は本地地
藏菩薩の變化なりば大悲闡提の菩薩なり無
佛世界の衆生と度し給ふ其由と案とる小昔切
利天喜見城なりて釋尊三度此菩薩の頂と摩て言

我今未調伏及至弥勒出世衆生と悉汝も付
属も大悲の威と振て此と化度をへとの給
へし爾時地藏菩薩唯願世尊不以後世惡業
衆生為慮と三度まうく誠言を以て如來よ領掌
まうく受合たまへり依之三塗極苦の底と以て住
家と給ひ毎日常朝よ必と燔燃猛火の中よ
入給ひ晝夜且暮小銅涌鉄牀の苦よ交り八寒八
熱の罪人の苦よ代て濟給ふ况復大悲相代て種

智の頭小火輪と頂と楞嚴の層よ鉄杖と受給ふ
何の菩薩も如此利生存と就中此菩薩ハ阿弥陀
如來の御弟子と二十五菩薩の隨一也殊よ誓
願深重の濁惡不善の凡夫と慈と無佛世界
の衆生を化給ふ又その所由在と彼の所由
と何ふと申ふ阿弥陀如來三塗勤苦の衆生と化
給ふんが爲小忝と果徳の佛身と隱さる
れ且く六道能化の地藏と現と給へる所由を

ちりふれん且那院の語小昔れ法藏ハ今地藏とい
 るり地藏法藏同體異名とハ天台小常ハ沙汰する
 所ちれば是皆弥陀の分身かり故ハ五七日の佛事
 へ行ハ其分野悉ク鏡の面小移る其時大王と始
 奉ク諸の冥官小至し皆悉ク隨喜ケるれ罪
 人ち此を見て喜ぶ夏限ハ其作善の功の勝
 劣小付て或ハ浄土ハ送ク或ハ人間天生ハ遣ル
 或ハ又次の王ハ渡ル

六七日の變成王ハ本地弥勒大士かり此王の所ハ詣
 る道小一の難所あり鉄丸所と名ク遠ク夏八百里
 の河原小大ありて丸と石充滿てり一處ハ不溜
 テ互ハ轉ハ巡テ打合所の音雷の如ク石毎小光
 と出とこと電小似たり罪人此ハ怖テ行しとす
 且ハ獄卒後より追立る力ありて走入ル此石
 小當ク體を打摧ル如此七日七夜とて其
 後變成王の御前小至る罪人も申上るや身



六七日
變成王

罪業左程まても存ぞトまと憲法の御裁斷
 の上うへ免角申上まへべき非あと然しもば徧ひ大王
 の御慈悲ごんじ何卒なんぞ此度計このたびの娑婆しやばへ今一度御
 飯下うけくだ身み小堪こ心の及候およん程ほどいいうう功徳
 善根ぜんこんと修行致しやうぎやう申まをへく若亦詐候わがも如何いか成罪
 科かも預あづかりませし程ほど只今計このいまの別義べつぎ御助ごんすけけ
 下くだれと懇切こんせつ御歎ごんたん申まをせし大王たいおう熟々じよくじよく聞給きかひく
 宣のたまひま後のち善ぜんと修しゆせんと返かへすくも神妙しんみやくあり

何日なんじつもも何なんとと教しよへば但たゞその功徳くんとく後の沙ごのさ
 汰たろろ今いま過あつつ方かたの善惡ぜんあくを勘かんある處ところふと
 汝なんぢもも一いつ生せいの間犯まをしたる罪科つみかのあん限かぎら
 遁にとと別義べつぎ免めんと事ことをを誰たれり別義べつぎと云
 けん其その上うへ汝なんぢが自業じごふの責せきる所ところかれる人の計まをり
 へへ非あと汝なんぢが罪業つみごふ未盡みじんへへと何なんぞ如此このごと諍しやうふ
 ややと懇切こんせつ御願ごんがん申まをしし甲斐かひももちち獄卒ごくそ
 と呼よびま此罪人このつみびとの罪つみの有無あやうと見みやまと宣のたまふ彼かの二双

の樹こゝろれ下くだふ三さんの道みちあり此こゝろ道みちを何なんれも己おのれが心こゝろに任まか
 せし行ゆべし汝なんぢの善ぜん人ひとなりは惡あく道みちは行ゆべしと
 仰おほせあり其その時とき鬼おに共とも罪つみ人ひとと將まさて彼かの三さんの辻つじ引ひ向むか
 へ早はや々やく行ゆべしと責せむは罪つみ人ひと思おもひ煩わづらふ此こゝろ三さんの中なか何なんれ
 善ぜん道みちなりん哀あはれ人ひとの教しゆふかと思おもふ處ところは獄ごく卒そと共とも
 塔たつを以もて遲おそくと責せむれど餘あまりの悲かなしみ目めと塞ふさ
 足あし不た任まかせし行ゆく程ほどは業ごう報ほうの悲かなしみ惡あく道みち不た走は
 こし始はじめはいふれ道みちと思おもふ俄ふに銅あつねの熱あつ湯たう涌あり出でて罪つみ

人の身みとやく其その時とき大だい王おうさればよ汝なんぢ惡あく人ひとなりと
 此こゝろ道みち不た行ゆべし然しかるを汝なんぢ眞まこと衆しゆと輕かろしめし罪つみ
 けれ由よしと偽いつはりに申まをしと條じょう奇き怪かい千せん万まん不ふ當たうなりと怒いか
 り給たまへば罪つみ人ひとの兎う角かくのひやう方かたもさくた口くちと
 身みとらひて恐おそれ入いる處ところは孝かう子この追お福ふく忽たち
 ちよ頭あたまもくの時ときは大だい王おう是こゝろを御ご覽らんあり此こゝろ罪つみ
 人ひとの娑し婆はの追お善ぜんあり早はや々やく此こゝろと免まとふと下くだ知し
 給たまへば即すなはちちぢり繩なはとく生なま處ところと善ぜん處ところ

定め給ふ時小取ての嬉さ、喻ん方々くけふ子に持
 つゝのちりと嬉さ餘り今この此喜と哀とつ子
 小知せしやと嬉泪は咽らり又其子不孝
 あり悪事とふせし親に弥々苦と増して惡處は
 入る心地觀經は其子造惡其親増苦其子修善
 其親添樂と説給へる即し是なり身體髮膚受
 父母と此身と生付撫育偏愛と厚蒙り親をんば
 生く孝養を旨とし死く追善と專ふとへ

若誤つ追福とせし恣小惡を造り我身と
 當來の苦果を招き親も苦と添ん
 誠は淺間布とや若爾は西夢が父と打
 ら舛婦が母と罵る罪小劣らんや必しも天雷を
 の身と裂き靈蛇その命と吸ふ非とも來報
 何ぞ免らんや誰の人と孝行を先として追福を
 行ふが井四孝れ董永の家貧して父を葬る方
 便かり泣々多く人と遣ふ家に至る有の儘と物語

何何卒錢三十貫借給へ其代よ幾年かりとも思
召小任く働奉公致とべし一向よ憑り続いいうふを
其方の律儀孝心と感入れ望の通し錢ハ貸べし
去乍らいふ親の葬式をいし連分限相應ふせし
れく左程丁寧ふせしと然るべしと云む董永泪
と浮て云く私不孝ゆして生涯心の儘よ親と養ふと
とと名ど責て一生の終りせんを葬式だけの式法
の通し小致さくいと存ト候へ是非よ御情をかかけ

られ下されと申せぬ涙感して二十貫と貸しり
董永大小喜び家よ飯し心の儘小嚴重の葬式
と行ひ而して其翌日家と片付次の日ハこの錢
と借たる主人へ奉公小往へしと先父の墓に至り
生か如く丁寧小禮と伸て云く我貧くして嚴父
を送る支と名と身と他人小賣て此と行ふ依之
責るハ七日の間御墓の如く可致身よ候へしと
遅退致時ハ約よ違の罪ありて忠孝全し難け

とく此より王家小参へ一人の使ら身小候へ此
己後ハ廟参も不任意恐乍解怠仕行へば不孝の
段々格別の御宥免希ひ奉らぬ勤は暇を以て泣々
出行途中あり誠は美麗なる女言を掛て董永とい
御自分ちなりやとつゝ如何少と董永ハ我妻也と
答へる終ら女之云く然らば妻一の願あり何卒
不便と加らば其許の妻と一給くれと云ふ董
永云く云何よと承知とい申とられとも某身

貧しく餘義を以て妻小此身を賣て家を片付只
今奉公小参る者なり我身すゝ心は任せて
増く妻を畜んばと思とつゝずとつへば爾らば
妻も君と諸共小奉公して働らば債も早くは
くつふへは是非よ召連給いと云ふ然らば免れ
角も主人へ参て頼見んと同道一有の儘と語
何卒一緒小召仕れ下と頼ハ主人女よ尋ら
様其方是よと覺たら女之業ハ何支がやと女の

云く絹と織と織と計と人は負候と主人大喜此方の家業の絹と扱を以て渡世と幸の六
 と主人召抱人價の仕業の様子小依て定むべしと
 召抱一日小絹十足と織僅十日の中
 小百足の絹と織揃たり其結構世は比し於是今
 早や債もつてひはべし夫婦共暇を給ふと
 申れど主人と淡く感し債と濟し其上多分の
 金と褒美し夫婦諸共喜び勇立飯る途中小

女の云く我の實の人間非と天帝汝が孝心を哀
 と董永が孝心定て三年の喪も勤たく思へ往て
 絹と織く債をげく其志を遂しめしと仰を
 蒙りて天降その事調上久く止めと身は非
 と今の暇申とわりと忽ち雲小乘して天を登り
 孝子傳に載たり如此の孝行を叶しん
 父母の貯與へたる財寶と何そ彼菩提の為小惜
 へらんや况又佛恩報盡の為わらんや孟宗雪中

の笋王祥が氷の中は魚是皆孝心の感とる處を
了况復孝養の家よは梵天帝釈四天大王无量
の神達來々共小任是と守護し給くは正しく
大聖世尊の金言なり誰り此と疑りんやれば郭
巨う金の釜と得たりしも揚威が虎の害と道し
と豈天恩よ非とや然とい孝行と致と輩は如是
諸天の擁護小預る但孝養よ二重の勝劣あり衣
食と施とと下品より父母の心小違とると中品と

功德と回向とると上品とと存生の父母小功德
と回向とると父母小後世菩提の道を勧て出離
生死の資糧と用意せしむると況や先達し父
母小於とやら小雪中の笋と堅氷の中は鯉魚も
何れせん法喜禪悅の味小如べし董永が身と
賣て葬と法の如よやも人間一旦礼敬のり
更に出離生死の便よかりし唯須く生前よ
勧て佛法と信ぜしめり父母の得脱と祈ると以て

最上の孝とて去るに經小八葉恩入無為眞實報
恩者と説給へると即ち此義なりこのゆへ

見聞集小六七日、變成王功德と待て罪福と云ふ
と云へば、偕此變成王、彌勤菩薩の化現して幸ふ衆
尊の付属とてけ、既小弥陀の名号と持給へて濟度
利生の方便小於て、異途有へて、則是具足無上
功德の名号と称念せん、彼本意なるものと明かり
偕罪人生所へて、不定なること、七日の王小遣る

